

オーストラリア先住民とジャパニーズ

—開かれた「和解」のために—

保莉 実*

1. 和解に向けたオーストラリア宣言

アボリジニ和解評議会 (Council for Aboriginal Reconciliation:以下、和解評議会と略記) は、2000年に「和解に向けたオーストラリア宣言 (Australian Declaration Towards Reconciliation:以下、和解宣言と略記)」を発表した。全12文 (11段落) からなるこの宣言は、次の一文ではじまる。

われわれ、多くの異なる出自からなるオーストラリアの諸民族は、和解の精神において共に歩むことを確約する。

つぎに、オーストラリア先住民であるアボリジニとトレス海峡諸島民が、オーストラリアの土地と水域の所有者であることが謳われ、それが条約や同意なくして植民地化されたことを承認する。そして先住民の伝統、法、信仰が現在まで存続していることを宣言した後に、歴史認識についての記述がある。若干長くなるが、その4文 (3段落) をここに引用する。

われわれのネイションは、真実を所有し、その過去の傷を癒す勇気を持たねばならず、そうすることで、われわれは共に平和な歩みをすすむことができる。

和解は、すべてのオーストラリア人の心と精神のうちに住まわなければならない。多くのステップが踏まれてきたが、われわれの共有された諸歴史を学んでいくことで、まだ多くのステップが残されている。

われわれが癒しの旅を歩むことで、ネイションの一方が謝罪し、悲しみを表明し、過去の不正を真摯に悔やみ、そしてもう一方は、謝罪を受け入れ、そして赦す。

この過去に対する態度表明の後、和解宣言は、先住民の自主決定を承認しつつすべてのオーストラリア人が自分たちの権利を享受できる将来を望み、先住民の遺産を尊重する「結束したオーストラリア (a united Australia)」への期待を表明しておわる¹⁾。

さて、すでに鎌田真弓が指摘しているように、1999年の草稿段階では、第1文の主語は、一体となった単数表記のオーストラリアの人々 (We the people of Australia) であったが、最終文書では、複数表記のオーストラリアの諸民族 (We the peoples of Australia) へと変更された²⁾。こうして「和解」を推進する主体が、複数の民族であることが強調されたわけだが、ここにアボリジニやトレス海峡諸島民の「民族」としてのアイデンティティへの希求、さらに非先住系オーストラリア人の多文化・多民族社会としてのオーストラリアを標榜しようとする意図がみてとれる。鎌田の言を借りれば、『「和解」の理念は、エスニック・マイノリティ集団としての多文化社会への統合を拒む先住「民族」を国民国家に統合する理念として、多文化主義と相互補完的な関係にあった³⁾』といえそうである。この宣言が、共有された諸歴史を学び、一方が謝罪してもう一方が赦すことで、「結束したオーストラリア」への歩みをめざしたものである以上、和解宣言の目的が、オーストラリア国民国家の (再) 統合にあることは疑いえない⁴⁾。

国民国家統合のための「和解」へのプロセス、筆者はこれを「閉じた和解」と呼びたいと思う。ここで「閉じた」という意味は、先住民をめぐ

* 日本学術振興会特別研究員

る諸問題が、ネーション統合のために、ネーション内部で処理されるべく扱われている特徴をさしている。いうまでもなく、先住民族の諸権利は、国際的な関心事であり、「国連先住民作業部会」の活動などでは、オーストラリアのアボリジニをはじめ、各国の先住民族どうしの国際的な連繫・連帯がおこなわれている⁶⁾。にもかかわらず、たとえば一般にアボリジニはオーストラリアの問題であり、アイヌは日本の問題であるとみなされているように、それぞれの先住民族は、それぞれの国家内部での権利獲得・主権回復のために活動をしているのであって、国際的な連繫も、多くの場合先住民社会を包摂した国家内部での地位向上を促進することを目的としている。要約すれば、先住民族をめぐるさまざまな議論は、国際的関心と連繫を保ちつつ解決が望まれているものの、それはどこまでも国内問題なのである。

国内問題としての先住民族の自決権や土地権といった明らかに重要な課題を否定したり、過小評価することが本稿の意図ではない。オーストラリア先住民族との和解にしても、オーストラリア国家によるアボリジニやトレス海峡諸島民への謝罪と保障は、緊急かつ重大なイシューである。しかし、謝罪や和解という問題は、国家の責任を明らかにすることでこれを解消し、あらたな国民統合へと向かう「閉じられた」プロセスとしてのみ扱われるべきなのであろうか。次のような問いを検討する必要があるように思われる——「先住民問題」は、本当にどこまでも「国内問題」でしかないのだろうか⁷⁾？

筆者は以前、先住民族に関する歴史叙述が、各国のナショナル・ヒストリーに回収されてしまうプロセスを批判的に検証し、先住民族の歴史を当該国の少数移民史と接続することで、ナショナル・ヒストリーを経由せずに「グローバル化」する方法を模索したことがある⁸⁾。本稿は、先住民族をめぐる問題系をグローバルに開いていくための一つのアプローチとして、「和解」をめぐる「記憶の継承」と「歴史主体と責任」とをキーワードにしなが、議論を進めてゆくことにする。その際に模索されるのは、国内問題として収斂され、国民統合をめざす「閉じた和解」とは逆のベクトルである。つまり、国内問題としての先住民族へ

の責任をはみ出してしまう「責任・連累」に注目することで、どこまでもナショナルに回収されることのない「開かれた和解」の可能性をめざすための試論として、以下の議論を位置づけたいと思う。

2. 「記憶の継承」問題：アジア系移民にとっての「和解」

既にみたように、和解宣言では、「多くの異なる出自からなるオーストラリアの諸民族」が、和解に向けて「共有された諸歴史」を学んでいくことが求められている。ここでも、1999年の草稿⁹⁾では単数扱いだった「共有された歴史 (our shared history)」が、最終文では複数の諸歴史 (our shared histories) に変更されている点は、注目されてよい。とはいえ、ここで共有されるべき諸歴史がいかなるものであるかは、和解評議会が1993年に刊行した『歴史の共有：すべてのオーストラリア人が共有すべき歴史理解』で示された認識以降、主だった変更はなされていない¹⁰⁾。『歴史の共有』を一読して明らかなのは、そこで問題となっている「共有すべき過去」とは、英国人によるオーストラリア侵略と虐殺の歴史であり、白人入植初期における先住民による和解の試みについてであり、オーストラリア主流社会から排除されて続けてきた先住民の地位についてであり、ミッションや政府による同化政策という文化抑圧についてである。以上のような過去を記述した後、『歴史の共有』の結論部では、次のように謳われている。「和解とは、過去の苦情・悲嘆 (grievances) に取り組み、先住系オーストラリア人と非先住系オーストラリア人との未来の関係にむけた新しい基礎を創り出すことである。」¹¹⁾

さて、次の一点のみ確認したい。「和解」のためにオーストラリア人全員が共有すべき歴史として提示された政府刊行物『歴史の共有』のなかに、アジア系移民などの、非白人系オーストラリア移民についての記述は、ない。多様な出自をもつオーストラリアの諸民族すべてが、白人による侵略の歴史を共有することが求められ、さらに、非先住系オーストラリア人のすべてが、先住系オーストラリア人に謝罪することが求められている

以上、必然的に次のような帰結を導きざるをえない。それは、アジア系オーストラリア移民といった英国出自ではないオーストラリア人も、すべからくアングロ・ケルト系移民が主導した侵略と抑圧の歴史に対して責任があり謝罪の義務がある、という帰結である。

ここでは、問題の所在を明らかにするために、極めて図式的ではあるが、さしあたり「アングロ・ケルト系（白人）主流社会」と「アジア系移民」と「先住民族」という、オーストラリアにおける三つの「歴史主体」を想定したいと思う。（ただし、こうしたカテゴリーの固定化がもたらす深刻な問題も、議論を進める中で明らかにしてゆきたい。）

検討されるべきは「記憶の継承」問題である。英国人を中心としたアングロ・ケルト系主導でなされたオーストラリア侵略と先住民族社会の抑圧の歴史を、やはり同じ白人主流社会によって人種差別的抑圧を受けてきたアジア系移民が、白人と同様の立場で「記憶」を共有し、先住民族に対して謝罪する根拠は、どこにあるのか？ アジア系移民にまったく言及していない、いわば「白人と先住民との関係史」として提示された「負の記憶」を、アジア系オーストラリア人は、「非先住民」というカテゴリーのなかで継承することを要求されている。いうなれば、オーストラリアの非先住系国民は、すべからくイギリス植民地主義の責任を平等に負わされているのである。これは、「国民の記憶」の捏造にかかわる問題を提起しているといえる。自身が戦後のレバノン系移民であるガッサン・ハージは、この問題を次のように整理している。

[戦後の]移民が、「こうした出来事は自分に関わりがない」と言うのと、オーストラリアにすっかり根付いた市民が別の立場から同じことをいうのとでは、どんな違いがあるのだろうか？移民は自分の過去ではない過去を感情的に理解できるだろうか？移民は、その過去と自分を重ねあわせることなしに、この国を真に「気にかける」ことができるだろうか？¹¹

ハージは、「移民」が、白豪主義といった人種

差別政策を耐えてきた点において、先住民と「記憶」を共有している点を強調しつつも、同時に「移民は、ある重要な意味で、植民地化のプロセスの継続である」とも指摘する。アジア系移民とは、こうした「矛盾する植民地的場所」を占める存在なのである¹²。その上でハージは、移民がオーストラリアの過去を共有するのは、アボリジニ民族の主権のための闘争に寄与する責任ゆえであるとする¹³。しかし移民にとって、このメカニズムは「オーストラリアとのすっきりした関係などなく、揺れ動く自存性ばかり…きわめてポストコロニアルな植民地状況である¹⁴」と言い、レバノン系移民としての「主観」を次のように文学的に発露する。

ここで、もうひとつ、うまいところに目をつけたかもしれない。不正を謝罪し、認めるために、平等の権利を求める闘争だ。こいつはうまくいくはずだ…。待てよ、たぶんわたしはここに所属できる。あのノエル・ピアソンとかいう奴が言っていた——オーストラリアは先住民と非先住民からなるって。気に入った。とうとう、わたしとジョン・ハワードを同じ高さに置くカテゴリーが見つかった¹⁵。[傍点はすべて、ハージによる。]

オーストラリアの「負の記憶」を白人主流社会と共有することで、アジア系移民が、ついにオーストラリアにおいて人種的平等を取り付けるといふ、この皮肉に満ちた提案をどう受け止めるかは、多様であってしかるべきである。だが、アジア系移民の立場から先住民族との「和解」のプロセスを論じる研究が驚くほど少ない中で、ハージの問題提起は一考に価するだろう。

筆者の知る限り、非白人系移民の「和解」への関与を明示的に論じた研究は、数えるほどしかない。ピーター・リードは、和解評議会の活動が、白人主流社会とアボリジニとの二者関係に収斂していることに警告を發し、「第三番目の立場」として非英国系オーストラリア人の「和解」プロセスへの参加の道を開くことを訴えている¹⁶。同様の指摘は、ディベッシュ・チャクラバルティによってより詳細に検討されている。チャクラバルティ

イは、『歴史の共有』の執筆者の一人でもある著名な歴史家ヘンリー・レイノルズが示した、「征服」への責任を基礎にした和解モデルは、必然的に白人侵略者とアボリジニ先住民という二項概念で構成されてしまうために、こうした征服過程が終了した後にオーストラリアに移民してきた戦後オーストラリア移民が和解プロセスから除外されてしまうと指摘する。一方でチャクラバルティが注目するのは、ムドゥルルーに代表される「植民地化」への責任を基礎にした和解モデルである。レイノルズの「征服パラダイム」と異なり、ムドゥルルーの「植民地化パラダイム」において問われるべき責任は、先住民族の生活世界や生活実践が、侵略されただけではなく、植民地化されたことにある¹⁷。

[植民地化パラダイムは]必ずしも(植民者と先住民のあいだに提示されている)「諸歴史の共有」を基礎にしていない。そうではなく、(政治的かつ知的に)植民地化されたという「苦境の共有」を基礎にしている¹⁸。

以上のようにチャクラバルティは、アジア系移民の和解プロセスへの参加を、ハージのように白人社会と「記憶を共有する」ことではなく、むしろ先住民と「苦境を共有する」ことで促そうとする。これもまた、一考に価する立場ではありそうだと。

ところで、こうした和解プロセスへのアジア系移民の参加を検討する研究は、より大きなオーストラリア歴史研究の潮流のなかに位置づけることができる。それは、オーストラリアで1960年代以降に、それぞれ独立して展開した二つの歴史研究の潮流、すなわちアボリジニ史研究とアジア系オーストラリア移民史研究が、1990年代後半に入って相互に対話を模索する関係に入ったことを契機としている¹⁹。これをさらに広い社会的コンテクストに置き換えれば、それぞれ独立して展開した、先住権運動と多文化主義というオーストラリアが抱える二つの課題が、近年相互に接近してきているのである²⁰。

アジア系移民史と先住民族史との接点に早くから着目していたのはアン・カーソイズである。カ

ーソイズは1973年に提出したPhD論文においてすでにこの問題を扱っているが²¹、近年ふたたびこの課題に取り組んだいくつかの論考を発表している²²。カーソイズは、多文化主義言説が盛んになる1980年代以降、アジア系移民とアボリジニと共に白人主流社会によって周辺化されてきたエスニシティとして捉える風潮が高まってきた、と指摘する。その枠組みの多くは、多文化主義理論を基礎にして、文化的多様性の文脈に先住民族を位置づけようとした。しかしこうした試みの多くが挫折している。なぜなら、先住民族自身が、自分たちをオーストラリアの数あるエスニック・マイノリティのひとつとして位置づけられることを明確に拒否しているからである²³。そこでカーソイズは、「先住民問題」を文化的多様性の文脈に位置づけるのではなく、むしろ反対に、多文化主義を「先住民問題」の文脈に位置づけるべきだと主張する。つまり、「移民問題」を植民地主義分析の枠組みで捉える方法である²⁴。これは一見、ポストコロニアルの視座で「和解」に参加しようとするチャクラバルティのアプローチと軌を一にしているようだが、カーソイズの場合は、「苦境の共有」ではなく、むしろアジア系移民もまたオーストラリアの土地を植民地化しているという、いわば「加害者」としての立場を強調する点に特徴がある。——「われわれは、他人の土地に暮らしているという事態を共有しているのだ。²⁵」ただし、身に覚えのない記憶をあえて継承することで「ジョン・ハワード(オーストラリア首相)と同じ高さ」に立つというハージのアクロバティックな議論とは異なり、カーソイズはむしろ、植民地化と脱植民地化の二つのプロセスが現在にいたるまで引きつづき同時に起こっているオーストラリアでは「最初の世代であれ、第6世代であれ、すべての移民には、引き続き存在する植民地主義にたいして連累(implications)をもつ²⁶」とする認識を基礎としている²⁷。カーソイズは、英国出自を中心としたアングロ・ケルト系によるオーストラリアの侵略、彼らが植民地化のなかで先住民族の土地や文化を剥奪してきた歴史、そしてアジア系移民を排除・従属化してきた歴史を「大きな枠組み(big picture)」として、議論の前提とする²⁸。だが、その具体的で複雑なプロセスを検討するなか

でアジア系移民と先住民族の関係史を扱う場合には、文化的多様性という枠組みではなく、むしろコロニアリズムのプロセスの一部として理解すること訴えているのである²³。

以上、「和解」をめぐるアジア系移民の位置づけと、その背後にある先住民史と非白人系オーストラリア移民史の接合を試みたいいくつかの論考を検討してきた。そこには、立場の違いこそあれ、レイシズムの犠牲者でありつつコロニアリズムの加害者であるような「アジア系オーストラリア移民」という視座で和解問題を考えるとき、「和解」をつうじて結束したオーストラリアを目指すといったナイーブな目標には現実味がなく、むしろ異なるポジションによって異なる「記憶・責任・連累」が問われる、いわば分裂したオーストラリアの(ポスト)コロニアル状況がみえてくるのがわかる。

しかし、アジア系オーストラリア人を視座に入れた、こうした新しいタイプの和解論を、筆者は「半開きの和解論」だと理解している。オーストラリア人を先住系と非先住系に割り、謝罪と赦しの儀式を通じて「結束したオーストラリア」への再統合を目指す和解宣言と比較すれば、たしかにこれらの議論は、記憶・歴史の分裂や多元性を強調し、和解のプロセスに持ち込まれるべき多様なポジションに注意を喚起している。にもかかわらず、これまでの議論があくまでも「オーストラリア人としての、オーストラリア人にとっての和解」である点は看過すべきではない。アジア系移民の立場からの「和解論」への介入は、記憶と責任をめぐる多様なポジションナリティを喚起しているが、にもかかわらず、これまでの議論は「国内問題としての和解」という枠組みに対する十分な批判となっているとはいいがたい。

以下本稿では、19世紀後半から20世紀中葉にかけて、主に真珠貝産業で働くために出かけていった日系オーストラリア出稼移民の歴史を手がかりに、これまでの研究動向をふまえて、しかしより「開かれた和解」をめざすために、「先住民問題」を脱ナショナル化する道筋を模索したい。

3. 日系出稼移民とオーストラリア先住民

オーストラリア北部沿岸で盛んだった真珠貝産業とそれに深くかかわった日系移民の歴史は、1970年代後半以降、豪日それぞれの研究者によって研究がなされてきた。先行研究に依拠しながら、まずは簡単に略史を整理したい²⁴。

オーストラリア北部沿岸での真珠貝の採集・交易活動は、アボリジニやトレス海峡諸島民の歴史と共に古い²⁵、白人によるオーストラリアの植民地化以降に本格化した真珠貝産業の歴史は、1860年代にはじまる。真珠貝採集というと、現在の感覚では装飾品としての真珠の粒を想起してしまうが、当時の真珠貝産業の需要を支えたのは、1850年代以降ヨーロッパ諸国で盛んになる真珠貝の貝殻を利用したボタン製造業であった。ブルームや木曜島(Thursday Island)といったオーストラリア北岸海域で、真珠貝の好漁場が「発見」されると、乱獲により衰退していたセイロン(現スリランカ)海域に代わる新たな漁場として急速に発展する。当初、植民地真珠貝業者は、オーストラリア先住民やマレー系の労働力を利用していたが、労働力不足は深刻であった。明治維新を迎えた日本からの出稼移民がオーストラリアで活動をはじめるのは、こうした状況下であった。

オーストラリアで真珠貝採集に従事した、記録に残っている最初の日本人は、1876年に木曜島のラガー船²⁶に乗り込んだ島根県出身の野波小次郎である²⁷。木曜島やブルームへの日系出稼移民は1880年代から本格化するが、産業の最盛期は20世紀初頭であった。世界の真珠漁獲量の80%をオーストラリアが占めていたこともある。1901年に連邦政府成立とともに採用された白豪主義移民政策にもかかわらず、日本からの労働移民は増え続けた。産業に従事した多くのアジア系移民の中でも、日系労働者がとくに重用された理由として、潜水病などで死亡率が10%にもなる危険な作業を勤勉にこなせたのが日本人だけであったからだ、とするのが一般的説明である²⁸。1919年7月における記録上の日本人労働者は、ブルームに約1,200人、木曜島に約600人である²⁹。その後、第一次大戦の影響もあり、真珠貝産業は徐々に衰退し、日

系移民も減少するが、こうした流れに壊滅的な影響を与えたのがアジア・太平洋戦争の勃発である。1941年の日本軍による真珠湾攻撃を契機にオーストラリアは日本に宣戦布告し、在豪日本人は抑留され³⁹、日本人潜水夫を欠いたオーストラリア真珠貝産業は、ひとまず事実上の終わりを告げる。戦後、真珠貝採集は細々と続けられるが、日本人への移民制限のために労働者の確保が困難であり、ラガー船や潜水服の管理にも支障をきたすほどであった。その後1953年、30余人の日本人がブルームで活動をはじめ。また1958年、アメリカの施政権下にあった沖縄の人々が「日本人ではない」との理由で、真珠貝産業に従事するための訪豪を許可されている⁴⁰。とはいえ、回復したかに見えた真珠貝産業も、プラスチック製ボタンが世界的に普及する中で1960年代には終焉した。

こうしたオーストラリア真珠貝産業の歴史とそれに従事した日系移民史において、先住民族と日系移民との関係に注目した研究は稀である。真珠貝産業史研究の先駆けであるデビッド・シソングは、論文の中で日系移民と先住民族との関係に触れていないし⁴¹、マリー・ベーンMarie Bearnの『真珠貝の誘惑』(1987)は、「女土人売買」や「好戦的な原住民」の襲撃について触れてはいるものの、真珠貝労働での協働関係や植民地収奪といったテーマを主眼的に扱っているわけではない⁴²。日本人の研究者(主に郷土史家)も、オーストラリアの人種差別に苦しみながら真珠貝産業を支えてきた日系移民の偉業を強調することが多い。たとえば、和歌山県の郷土史家である久原脩司は、次のように述べている。

日本人漁民はこれらいくたの困難に耐え、勝ちぬき、命がけの勇気と努力によって潜水の技術の改良と新しい漁場の発見をおこない、日本人独得の妙技で他国人の追隨を許さずこの漁業を発展させてきたのである⁴³。

やはり郷土史家である小川平が著した『アラフラ海の真珠』(1976年)も、基本的には久原と同じ視座に立っているが、「未開人種ブッシュマン」という表題を与えられた一節で、日系移民が語ったオーストラリア先住民観を紹介している。そこ

での元日本人潜水夫たちの語りはおどろくほど人種差別的偏見にあふれている。たとえば、ブッシュに暮らすアボリジニに襲われて死体を食われた話が紹介され、またアボリジニの女性には「発情期」があるとされている⁴⁴。さらに真珠貝産業で労働に従事し、比較的定住型の生活をしてきたアボリジニについては、以下のように記されている。

定住したブッシュマンを採貝船やナマコ船ではよく雇用する。布地や煙草を与えるだけで十分満足し、現金を欲しがらないからである。それに魚や鳥を取るのにも彼らの神業が役立つ。
[中略] 彼らの嗅覚や視覚は、人間離れした異能ぶりを十分発揮する。それは、ほとんど動物に近い⁴⁵。

こうした記述にうかがえるのは、日系オーストラリア移民が、白人によるレイシズムに苦しめられつつも、一方でオーストラリア先住民族に対して人種差別的眼差しを向けていたという二重の差別構造である。こうした人種間階層は、オーストラリア北部の地方町では、典型的だった。たとえば、ブルームにおける白人、アジア人、アボリジニの間にみられた人種隔離的な社会構造は、ベーンや中野不二男が詳しく描写している⁴⁶。アジア系オーストラリア移民は、レイシズムの「犠牲者」であっただけではなく、「加害者」でもあったのだ。

ここまで検討してきた先行研究に共通しているのは、いわば真珠貝産業史における先住民族の立場への無理解である。日系移民が、異国の地での苦難に立ち向かって真珠貝産業を発展させたというプロットは、基本的には、アボリジニ社会の排除と抑圧を無視してきた1960年代以前の「オーストラリア史」の歴史叙述と大差がない。苦難に立ち向かった主人公が、白人であるか、日本人であるかの違いがあるだけである。そこには、先住民族史の視座でみえてくる植民地収奪に対する問題意識が欠如しているといわねばならない。

さて次に、多少なりとも先住民族の立場に配慮した、真珠貝産業史におけるアジア系移民と先住民族との関係を検討した作品をみてゆきたい。こ